



六
花

4

2021

りっかはいくかい

千載具眼徒埃



山田六甲

はなてまえごかんのきほうしさいにみよ

裸木の影静脈や動脈や
金継の茶碗に割りし寒卵
花点前互換機鋒看
麦青む吾ふるさとを振り向かず
待合や枯木の中の喫茶店
捨鹿寺の坂を登れば花の句碑
猪名川の花の招待状届く
花冷えの雪彦山へ来てをりぬ
ここにあれ埋めたよ花の蕾かな
自転車で妻はころびぬ花の下

萬

抽斗の奥の手帳に花葉
筍を掘りに荒縄もつて来し
筍のさしみに土の味さぐり
母の手に引かれて花に入学す
家壊つ屋根の桜をそのままに
雛納我が家は女系家族なり
花吹雪伊予長浜は母の郷
渦潮を観にゆく眼鏡弦仕立
枝垂桜暖簾のごとく潜りけり
春宵の葉書投函して悔ひぬ
原稿が三日も遅れぬる桜

吾子逝けり



笹村 政子

吾子逝くや冬あかつきの薄明に
寒茜荒ぶる海を口にせり
うなづくは別れのことば月冴ゆる
二人子のひとり逝かしめ冬ともし
斎場へむかふ車窓に初荷旗
遺骨抱く膝ほのぼのと藪柑子
更のまま遺品となりし初日記

風花に届かざれども手をかざす
冴ゆる夜や読めぬ楽譜をよんでをり
逝きし子の名をつぶやけり冬の月

▽吾子（お嬢さん）を喪った時刻の状況を、虚子が子規の死去した状況（子規逝くや十七日の月明に）の句と奇しくも同じ句境で吐露した。わが子の死を俳句で示せた幸福なのか逆に俳句でしめさなければならなかった不幸なのか、すぐには判定できないが、俳人の使命であるとも思える。すでに買っていた来年の日記帳も一字も記することなく閉じた無念が「更のまま」に凝縮されているといえよう。哀しみ無念を俳句に打ち込んで行くことも供養になるし、自らへの慰みにもなるはずである▽これら慟哭の10句が読み手のわれらに、さもあらんと迫ってくる。その中でも風花の句には、風花が天国へ去ってゆくお嬢さんの骸や魂にも思われ、触れようとしても届かぬ哀しさともどかしさの状況が読み取れる。その状況は作者にとっても読者にとっても深く印象に刻みつけられたのである。こういうことが出来るのは俳人だからこそ訴えられたとも思える。

これもよし



志方 章子

柚子湯して一人暮らしのこれもよし
子の去にてポインセチアの残りけり
湯冷めしてまだまだ尽きぬ話かな
二人分つくる一人の蕪汁
冬の夜の耳を澄ませる一人かな
日記果つ夫逝きしこと書かずして
正月や淋しき空の色ならむ

正月の過ぎて安堵の疲れかな
冬月に触れむばかりの鳶かな
初春の決意などなし一人身に

▽柚子湯の句、この間ご主人を亡くしたばかりなのに「これもよし」と、飄々と詠めるのも俳句の効用と決めて、すでに立ち直りの姿勢を諧謔的に詠んだのがすごい。自らの立場を急に変えられた境涯をしかと受け止められるのが俳人の強さである。かといって決して亡くなったご主人への裏切りでも何でもない。立ち直ろうとする姿に故人は逆に安心しているのだと思う。句を詠んで行くことが大きな供養になるし、思い出してあげることが大いなる供養なのである。「日記果つ」などの句は逆でそれも大きな供養であると思うのだ▽鳶の句、月は薄暮か昼月なのだろう。それに触れるばかりに悠々と飛ぶ鳶を写生しているのも精神的余裕である。これら十句の中で最も淋しいだろうなと思うのは「二人分作る」蕪汁である。二人分のうち一人分は霊前へお供えをするためであるし、またついつい今までの夫婦の食卓分を生前のように二人分作ってしまったよ、というユーモアも含んでいる句かもしれない。

はまなす抄

マフラー ◎ 升田ヤス子

包み解く雪の匂ひの高野槇
炒り胡麻の爆ぜくる間合ひ雪催
タクシーに忘れし黒のマフラーは
大つごもり火傷の指に貼るアロエ
羽子板にやさしき窪みありにけり
喰積や母の教への味噌なます
真夜覚めて木匙のあはき葛湯かな

薺摘むこれはたんぽぽかも知れず
春隣文香の添ふ一筆箋
エンディングノート求めぬ春隣

▽「薺(なずな)摘む」正月七日の七草粥に用いる薺を摘むこと。もしかしたら、この草はナズナでなくタンポポかもしれない、と思いながら摘んだ。タンポポも決して毒ではないから、まあいいか、というあいまいさに人柄がでて面白い、が念のため食べても害はないか調べてみたら、明治時代に野菜として日本に入ってきたものが野生化したものといわれるが、江戸時代の頃から、たんぽぽをおひたしや汁物に入れて食べていた記録があり明治時代に入ってから花は天ぷら、茎はきんぴらにして食べていた歴史があるというから大丈夫。「高野槇」の句も雪の匂ひを感じた感覚が鋭く、その言葉によって槇の瑞々しい色が鮮やかに伝わってくる▽「タクシーに」の句は「マフラーは」と尻切れとんぼのまま終わらせてあるところに「はてどこに忘れたのだろう？」と想像を広げるように表現したのはヤス子の若さである。こういう挑戦は称えたい▽「文香(ふみこう)、一筆箋にかすかな香りをつけてあるもの」で優美な人柄がしのばれる。

聖五月抄

池底の氷り ◎ 善野 行

池底の氷りて石を縛めぬ
注連縄を替へてすがしき杜の空
御降りの頬へみぞれてきたりけり
去年今年息詰まる世を生きつづけ
寒潮と荒磯噛み合ふ枯木灘
寒鴉なんぞこの田におびただし
大寒や押し出され来し受験生

歯を抜かれうつけて帰る寒さかな
頬被りして面接に出向きけり
鱧酒に一夜をもつていかれけり

▽行の作品は格調高く、緊張感が漂う。それだけに印象深く後世に残すような秀句を生む。池底の水は少なく冬場は凍る。氷は石を縛め（いましめ）ているというのだ。精神的な戒めと形容的な縛めが印象深い。池の底で白い氷によって身動きのならぬ石の寒さ辛さを思わしめる。この句は六花人の秀句として残したい作品。本来なら夢風撰が行ほどになればその必要もないだろう▽歯を抜かれ麻醉の残る状態とひとまず痛みから解放された精神状態を「うつけて」という言葉を斡旋し表現した気づきの確で読者を得心させる▽彼の場合、生徒を面接しているときのことか、それとも国語講師として高校へ面接にでかけたのかどちらか解からないが、どちらにしても頬かむりして面接などあり得ないのに、彼ならあるかもしれないと思わせるユーモアによって人間の厚みを思わせる▽年中で一番寒い時に受験する生徒の試験が終わった様子はまさに「押し出され」という表現が当たっている。出てきた受験生の白息で辺りが曇るようである▽「一夜をもつていかれた」というのが行の凄み。楽しんで呑んで語り合うはずが旨い鱧酒に酔いつぶれたというのである。

人参の日の出 ◎ 住田千代子

雑炊にひとひら魚の鱗かな
猫舌の幾度ともなく吹く雑炊
捌かれて水を吹き上ぐ海鼠かな
すこやかに漢方を溶く去年今年
み仏の花に若水足しにけり
人参の日の出めでたき雑煮かな
まじなひを一言賽に絵双六

縫初の赤き糸屑まるめけり
松の枝に懸りし羽子を小さき手へ
粥柱吉の兆しを湯気にな

▽日の出を人参に見立てて飾った雑煮が目出度いと詠んだ。雑煮に入れる赤い人参に飾り包丁を入れず丸のまま輪切りにしたのだろう。それを初日の出に見立てた軽みが最高でお餅の白が引き立つように表現したのである。紅白雑煮のおめでたい元日になった。こういう発想の柔軟さが千代子俳句の急速に進化した成果である。本来夢風撰だが政子以下千代子までは毎月夢風撰級の句がある作家なので今月から対象外にしようと思う▽他の句、「雑炊」に魚のうるこが一片混じっていると鍋料理で使った魚の鱗がのこっていたのを詠んだ小さな処に眼を利かしたのも俳句の手法である。さぞかし魚の出汁の旨味がでている雑炊であろう。猫舌の人でもこういう旨い雑炊ならばふうふう吹きながらでも食べるのである▽「縫初」の句、赤い糸は様々な物語を秘めているようで、それを丸めて捨てることも女性のさっぱりした気性かもしれず、あれこれ想像が広がる。

底冷え ◎ 藤生不二男

水鳥の日暮るるほどに鳴きにけり
底冷えの底の抜けたる水面かな
鍋焼きやおそらく彼奴もこんなもの
虚ろなる日の傾けり枇杷の花
竹馬のこはごは跨ぐ丸太かな
風呂焚けば現はれ出づる枯木屋
対岸の枯蘆原の夕づけり
臘梅の匂ひのよどむそこかしこ
風花の目を離れたる行方かな
曾根崎に寄り道をして雪女郎

▽第二句、実態のない感覚的な底が抜けたように冷えた水面を詠んだ。水は凍る一步手前の時がもつとも冷たい。「底の抜けた」という言葉ですぐに思い起こすのは吉屋信子が尾崎放哉を書いた小説の題名「底の抜けた柄杓」で、ひしゃくは実態がある比喩であるが掲句の「底抜け」とは「並外れていて、際限がないこと」。掲句の場合は度を越した底冷えで、同じ寒さでも、底冷えとは通常の冬の寒さとは別格。とにかく心根まで冷える。そういう水面を目の前にしたような冷えが、みぬちまで浸透してくると詠んだ厳しい句。▽「鍋焼き」の句はおそらく舌を焼くような奴のことである。▽「風花」が眼の前を通り過ぎ、行方が分からなくなった何かの例え。風花を見失って自らをも見失ったという感慨か。▽曾根崎と雪女郎はつきすぎ▽「流燈抄」と銘打った所以は特集二百句の「流燈を離れたる手の残りけり」から。

月といふ指揮者を待てる樹氷林 平居澂子

交響樂の舞台で指揮者を待っているのが樹氷森。しばらくすると指揮者、寒月が登場し指揮棒を少しあげる。楽団員は楽器を手にし、今から演奏が始まる。観衆も固唾を吞んで息を殺すいつもの演奏会風景だ、指揮者は六甲の好きな「グスタボ・アドルフオ・ドウダメル・ラミレス」。演奏後のびっくりするようなアンコールはおどろくぞ!。

つきとうしきしやをまてるじゆひょうりん ひらいみおこ

甲 山 六 甲 連 山 初 景 色

初 山 へ 向 ふ バ ス 停 風 の 杜

謀 反 氣 の む く む く 育 ち 霜 柱

散 骨 の 山 に 初 雪 黙 禱 す

月 とい ぶ 指 揮 者 を 待 て る 樹 氷 林

マ ス ク し て 越 ゆ る 県 境 姉 の 許

一 文 字 も 記 さ ぬ 葉 書 や 寒 の 入

賀 状 来 ぬ こ と に 囚 は れ 七 日 過 ぐ

短 日 の メ ー ル の 訃 報 惻 惻 と

寒 茜 消 え 入 る 先 を 追 ひ 続 け